北海道の国際協力情報紙
vol.80 2017 WINTER

であい

公益社団法人
北海道国際交流・協力総合センター
HIECC／ハイエック
Hokkaido International Exchange and Cooperation Center

特集

「高校生が見たフィリピン」
―平成28年度高校生・アジアの架け橋養成事業―

スペイン統治時代の荘厳な要塞を背に思い出の一枚

北海道国際交流・協力総合センター（HIECC）では、開発教育の実践者である開発教育ファシリテーター２名による指導のもと、道内の高校生を対象に開発途上国へのスタディツアーを含む人材育成事業を平成22年度より実施。今年度は札幌、室蘭、旭川、帯広などの地域から選抜された10名の高校生が参加。２回の事前研修を経て８月にフィリピンを訪問し、NGOが支援する子どもとの交流活動や、ごみ処理場のあるパヤタス地区を見学した。帰国後は２回の事後研修を経て、２グループに分かれ所属する高校で報告会を行った。

●子どもたちの笑顔が教えてくれたこと

フィリピンの首都・マニラの年間平均気温は25度以上。８月は１年の中で最も雨量が多く、空港を降りると湿気を含んだ空気が体にまとわりつく。高校生は車窓から見える高層ビル群が織りなす大都会の様相に興奮しつつ、これから過ごすフィリピンでの8日間に期待と不安を抱きながら初日の夜は眠りについた。

滞在中は青少年対象の自立支援施設や乳児院、特別支援学校などを訪問した。どこに行っても、子どもたちが笑顔を浮かべ手を振って迎えてくれた。「マガンダンウマガポ」（タガログ語で“おはよう”の意）と話しかけると、恥ずかしそうに挨拶を返してくれる。その後、ダンスやゲームをしているうちに、いつの間にか手を繋いで一緒にはしゃぎまわっていた。つい数時間前に会った子どもたちの笑顔と優しさに触れ、不安な気落ちはいつの間にか消えていた。しかし、このツアーで訪れた施設の子どもたちは、路上で生活をしているところを拾われたり、育児放棄をされたりと、家族と一緒に住めない背景を持つ。毎晩のホテルのミーティングでは、交流中に見せてくれた屈託のない笑顔とその背景にある事実に葛藤し、仲間同士で疑問や意見をぶつけ合った。

笑顔があればすぐに子どもたちと仲良しに

●ある家族との出会い

ごみ処理場のあるパヤタス地区も訪れた。280万人が暮らすこの地区には商店街や学校もあり、一見何の変哲もない町に見えるが、ゴミが積み重なってできた巨大な山が眼前に迫ると現実に打ちのめされた。ごみをリサイクルして生計を立てているという家庭も訪問した。家は3畳ほどのスペースしかなく、そこに両親と子ども7人が住んでいるという。部屋にあるサント・ニーニョ（キリストの幼少期の立像）のことに触れると、ごみ山から拾ってきたと教えてくれたので、クリスマスの過ごし方を尋ねてみた。「特別なことは何もできないけど、家族揃ってクリスマスを過ごせるのが幸せです」と小さな声で母親が答えてくれた。熱気がこもった部屋の中で汗を流す高校生を見て、段ボールの端で扇いでくれる優しい子どもたちは、この母親の愛情に包まれて育ったのだろう。しかし、1日300円程度の生活費で暮らしていることをスタッフの方から聞き、ごみ山の麓で劣悪な環境を強いられ生活している人がいるという現実に胸が締め付けられた。

特別支援学校の子どもたちとの忘れられない出会い

●感謝を言葉で伝えられる人に

室蘭市内の高校で心をこめて伝えた報告会

ある施設のスタッフが別れ際に高校生にこう語りかけた。「家族と一緒にいられることを大切に思ってください」。フィリピンで過ごした8日間で、10名はそれぞれ違う場面で自分を見守り支えてきてくれた人を心に思い浮かべたのかもしれない。帰国後の研修で、「帰ってからすぐに祖父母に手紙を書きました」、「勇気を出して母親に“今まで育ててきてくれてありがとう”と伝えました」と高校生たちはすでに行動に移していた。そんな自分自身の変化や思いを原稿に認め、報告会では同じ年代の相手に緊張しながらも一生懸命伝えた。同世代の目線でフィリピンでの経験を語る10人の言葉から共感の輪は広がり、高校生たちは自らの言葉の力で「アジアの架け橋」を築いていた。

「JICA国際協力エッセイコンテスト」（（独）国際協力機構主催）に参加高校生１０名が応募し、国際協力特別賞に２名、国内機関長賞に1名が入賞しました。

私の国際協力活動日記

第11回

配属先の研修生たちと卒業の記念写真
（右から2番目が筆者）

山田　尚嗣 さん

私は2014年10月から2年間、エチオピアの自動車整備隊員として活動をして来ました。エチオピアで近年増加している電子制御エンジンを搭載した自動車の技術を教える活動をしてきました。配属先は首都アディスアベバにある職業訓練校で、講師として研修生に授業をしたり、授業の質を同僚と一緒に改善する活動を行ってきました。大変だったのは、私は今まで講師として人の前に立って教えるという経験は無く、そんな私が一人で授業をやるなんて不安でいっぱいでしたが、同僚のサポートや研修生の学ぶ熱意にかなり助けられなんとか2年間やりきることが出来ました。今でも印象に残っている思い出は、街を歩いていると研修生に「ティーチャー!」と声をかけられたことです。なんてこと無い事ですが、自分にとっては先生として認められたというか、実感が沸き嬉しくなりました。2年間を終えてみて、結果的に私は先生のはずなのに、生活の知恵や価値観など彼らから教えてもらうことのほうが圧倒的に多くどっちが先生なのか分らないくらいです。

赴任当初、現地の食事が合わずいつもお腹を下したり、毎晩の停電にイライラしていましたが、そんな時にいつもエチオピア人の陽気さに触れ、気が付いたらそんな事も忘れさせてくれるくらいエチオピアが好きになっている自分がいました。カフェでたまたま隣に座ったエチオピア人が私を見て、外国人だからとさりげなく私の分まで会計を払ってくれた事もあり、本当に屈託の無い優しさに出会えたことも私の貴重な経験です。

今後は自動車関連の企業に就職してもっと海外へ出たいと考えています。いつかはエチオピアも訪れてみたいと思っています。エチオピアは私をいつも成長させてくれます。

青年海外協力隊　平成26年度2次隊
職種：自動車整備
派遣国：エチオピア

毎日お世話になったコーヒーショップの店員さんと

多文化共生ワークショップ

北海道の未来と多文化共生

（12月10日（土）　かでる2・7）

12月10日（土）かでる2・7（札幌）で、「北海道の未来と多文化共生」と題しワークショップが行われた。

このワークショップは、2010（平成22）年に1回目を開催して以来、毎年、（公財）札幌国際プラザ（以下、「プラザ」）とハイエックが共催のうえ開催している。グローバル化の加速度的な進展に伴い、人やモノの動きがボーダーレスの時代を迎え、道内においても外国人住民等が増加傾向にある中、外国人住民と道民が互いを地域の一員として認め合い、対等に地域社会の構成員として共に生きて行く環境づくり、所謂「多文化共生」の促進を目的としている。

プラザとハイエックが中心となり、道内各地又は札幌市内においてそれぞれで活動する国際交流等の団体同志がネットワーク化を図るとともに、共に多文化共生社会の実現に向け、様々なことをテーマにした基調講演、事例紹介やディスカッションなどを実施しワークショップを開催してきた。

今年度は、2006年3月に総務省から「多文化共生の推進に関する研究会報告書」及び「地域における多文化共生推進プラン」が発表されてから10年の節目を迎えたことから、これまでの活動を振返るとともに、今後の取組み等を見据えるためのワークショップとした。

「北海道の未来と多文化共生」について語る講師の田村太郎氏

10年前と現在の外国人受入状況について、明らかに異なっているのが、訪日外国人観光客（インバウンド客）の急増であり、基調講演の中で、講師の田村太郎氏（（特活）多文化共生センター大阪 代表理事）は、以前、本紙でも紹介したとおり、訪日外国人向けの「インバウンド」施策と外国人住民との共生をめざす「多文化共生」施策は、切れ目なくつなぐことが重要であると改めて訴えるとともに、多様性を受入れ、誰もが活躍できる社会を地域全体で進めなければ、地域が危機的な状況になると警鐘を鳴らした。

分科会では、本道で勉強した外国人留学生や海外を経験した日本の若者などが、地域のチカラとして活躍するための取組みや、今後、その土壌づくりをどのように進めるかについて、事例発表とともに活発なディスカッションが行われた。

分科会ではグローバル人材の活躍や地域づくりについて話し合った

さっぽろ 研修員・留学生日記

自分の国と正反対の経験と父祖の志が将来の夢を確実なものにしてくれた

近藤 山下 アルトゥロ 太 さん
パラグアイ共和国
（北海学園大学工学部にて「環境工学」を研修）

沼田 ネストル ディエゴ さん
アルゼンチン共和国
（北電力設備工事株式会社にて「電気技術」を研修）

田川 ラファエル 竹男 さん
ブラジル連邦共和国
（北海道大学工学研究院にて「構造デザイン工学（橋梁）」を研究）

平成28年度ハイエック受入の北海道海外移住者子弟留学生は4月に、北海道海外技術研修員は6月に来道し、それぞれの専門の勉強をスタート。3月には全てのプログラムを終える。

それぞれの北海道への思い

両親の仕事の関係で4才から神奈川県に在住し、日本の小学校を卒業した日系3世の田川君。15年ぶりの日本での生活になるが、北海道に来るのは今回が初めて。幼少期に移住した旭川出身の祖父からは「北海道は寒い」としか聞いたことがなかったが、自分の専門分野の研究のために北海道に留学したいと思っていた。「生まれてからずっと日本語を勉強していたし、日系人として一度は日本に行ってみたかった」と語るのは、母親が岩見沢出身で日系2世の近藤君。実際に来てみると、地理的にも文化的にも自国と正反対の経験ができ、「毎日が楽しいです」と笑顔で語った。妹背牛町にルーツを持つ日系2世の沼田君は、「日本には興味はあったが、自分にとって北海道が特別だとは思っていなかった」と率直な思いを口にした。「実は、北海道に残った伯父は病弱で船に乗れず、南米移住が叶わなかった。残念ながら伯父は亡くなってしまったが、滝川市に住む従兄からいろいろな話を聞くことができ、北海道への思いが強くなりました」と語った。研修や留学という機会を通して、それぞれの北海道への気持ちに変化があったようだ。

北海道と南米で生活して見えたこと

北海道に住んでの感想をたずねると、「自然がきれい」「交通の便が良い」「ゆったりしていて住みやすい」と3人とも好印象。「地下街がどこまでも繋がり、地下にたくさんの人がいるのには驚きました」とユニークな感想も。一方、「知らない人同士が簡単に話せるフレンドリーさ」や「お肉の美味しさ」など南米の良い面にも気付けた。

道内の河川や湿原の水質調査や分析を行った近藤君は、今では実験機材を器用に使いこなす。「自分が通った大学には機材がほとんどなく、実際にあっても少し触れられる程度。将来は、農業と環境汚染に関係する研究を深めてみたい」と向学心を燃やしていた。「ブラジルの教授は社会に出てからの実践的な内容を教えるが、日本は研究に集中できる環境がある」と専門分野の知見を広げた田川君。「北海道で研究したメリットを活かし、ブラジルの構造設計事務所で働きたい」と具体的な目標を掲げる。電気技術という広範囲の研修の中で、設備や空調関係の様々な業務を学んだ沼田君。「電気関係の仕事の視野が広がったのは大きい。法的な制度もなく現状は難しいが、将来はアルゼンチンでソーラー関係の仕事に携わりたい」と意欲的に将来の夢を語っていた。

父祖の志を北海道で引き継いだ3人は、帰国後それぞれの地で新たな道を切り開いていくのだろう。

平成28年度「国際交流 in 積丹町」（11月26日～27日　積丹町）

かるたを挟んで真剣勝負に挑むロシアの留学生

今年で16回目となる「国際交流 in 積丹」（主催：積丹町教育委員会）が11月26日（土）と27日（日）の2日間で行われ、中国、韓国、インドネシア、マレーシア、ロシア、ウクライナ、ボリビア、アルゼンチンなど10か国12名の留学生が同町を訪れた。

北海道を代表する民謡「ソーラン節」の故郷として知られる積丹町。最初に訪れた鰊番屋旧山〆福井邸は大正初期に建築されたと言われ、町内に残る唯一の鰊番屋。ガイドの方が丁寧に往時のヤン衆の生活の様子を説明してくださり、留学生たちはニシン漁最盛時にもたらされた活気を直に感じていた。また、その日はちょうど「1126（いいふろ）」の日に当たり、無料開放を利用して温泉体験。眺望が有名な町営の露天風呂で日頃の勉強の疲れを癒し、お風呂上りの紅潮した表情はすっかりリラックスしていた。

町内見学を初日にエンジョイした今回の一番の目的は学校訪問。留学生12名は町内の小学校4校と中学校1校に分かれてそれぞれの交流活動へ。初めて学校訪問を経験する学生の中には緊張した面持ちの人もいたが、この日を楽しみに準備をしてきた子どもたちが時にリードしながら、次第に打ち解けた雰囲気へと変化。留学生たちは、折り紙やかるたなどの日本の遊び、またお好み焼き作りや餅つきなどを経験し、子どもたちと一緒に活動しながら自然に笑みを浮かべていた。また、日本語が苦手な留学生にも臆せず接する積丹の子どもたちの姿から、長年国際交流を継続して培われたたくましさが表れていた。

ボリビアの留学生は中学生と一緒にお好み焼き作り

インドネシアから参加したレザさんは、「留学期間が終わる前に、子どもたちに会いにもう一度積丹町を訪れたい」と涙ながらに感想を述べていた。約4時間余りの短い時間だったが、積丹の子どもたちも留学生もそれぞれが特別な思いを胸に一日を終えた。

“北海道・十勝と海外をつなぐ”トークイベント

（12月3日　土曜日　帯広畜産大学　講堂）

5名のパネリストと国際協力への思いを語るステージ上の広瀬さん

参加者全員が「自分ができる国際協力」を画用紙に書き記念撮影

JICA北海道国際センター（帯広）、森の交流館・十勝、十勝インターナショナル協会が、道東・十勝に国際協力の拠点を置いてから20周年を迎え、その節目を記念し女優の広瀬アリスさんを迎えて帯広市内でトークイベントが開催された（主催：道東・十勝・帯広国際協力拠点20周年記念事業実行委員会）。

広瀬さんは2015年からJICAが関わる「なんとかしなきゃ!プロジェクト」のメンバーに就任し、今までフィリピンとインドを訪問。この2か国を訪れて、「若い世代の人に国際協力を知ってもらいたい。もっと伝えたい」という思いが強くなったと話す。トークイベントの第一部では、現地の様子をスクリーンに映し出しながら、見てきて感じたことなどを語った。インドのデリー・メトロ（地下鉄）では、女性専用車両の導入によって移動の自由が増え、女性の社会進出を促したという話を聞き、実際に乗車することで国際協力の現場を体感。また、フィリピンの貧困地域に住む女性がフェアトレードの刺繍グッズを作ることで収入を手にし、楽しそうに働く姿を目にし、仕事のありがたみに気付けた。フェアトレードを介して国際貢献できることを知った広瀬さんは、作る人も買う人も“ハッピー”という気持ちを込めて、ダブル・スマイルのTシャツをデザイン。自分が好きなことを通して助け合えるという実体験を交えながら、「小さな協力が大きな協力に繋がる」と参加者に訴えた。

第二部は地元の大学生や高校生、若手農業者5名も登壇し、国際協力に対する思いや、それぞれの立場でできる国際協力について語り合った。パネリストの一人の高校生は、中学生までの内気な自分を変えてみたいと、初めての海外旅行でカンボジアスタディツアーに参加。その後は生徒会長を務めるなど自身の成長を感じたことから、「海外じゃなくても、勇気を出して一歩踏み出すことが大切」と語った。広瀬さんは海外での経験を持ちながら、地域で様々な取り組みを展開するパネリストの話に真剣に耳を傾けていた。

イベント会場には、十勝に住む高校生や大学生など約330名が参加。女優として輝き続けながら国際協力に取り組む広瀬さんの姿と言葉が、これからの十勝を担う若い世代の心に届き、十勝から世界へ新たな一歩を踏み出すイベントとなった。

第11回 医療英語セミナー

（11月3日（木・祝）　旭川市国際交流センター）

ロールプレイングなど実践的な内容を通じて現場で役立つ英語表現を学べる「医療英語セミナー」（主催：旭川市国際交流委員会）。押味貴之氏（国際医療福祉大学准教授&日本医学英語教育学会理事長）とE.H. ジェーゴ氏（日本大学医学部助教&日本医学英語教育学会評議員）の2名を講師に迎え、Feeeal（フィール）旭川7階で開催された。

午前の部のテーマは「日本の医療制度を英語で説明しよう」。講師の押味氏が海外の保険制度を数例紹介し、「アメリカの保険制度はどれに当たりますか」など問いかけながら進行。カナダ出身のジェーゴ氏は、「日本では病気や怪我をすると、紹介状がなくてもすぐに専門医の診察を受けられる。それは欧米出身の患者にはあり得ないこと」という話に会場から驚きの声も。日本の医療制度について特集したCNN（アメリカのニュース）の動画も視聴し、参加者は日本の制度が外からどう見えるのかと気付きを得ながら学べる時間となった。

午後の部の内容は「日本語の問診票と同意書を英語で説明しよう」。医療用語で埋め尽くされた日本語の問診票を手にすると、思わず戸惑う参加者も。すると押味氏の「難しいと感じるところを率直にぼやいてください。」という言葉で安堵の表情に。セミナー中は、英語の聞き取り作業やグループワークが多く盛り込まれ、難解な医学用語に抵抗を感じる人も、終始積極的に学ぶことができた。また日本人が誤って使いやすい英語表現など両講師によるユーモアあるエピソード紹介が、参加者の興味・関心を最後まで持続させていた。

医療制度の違いについて真剣に学ぶ参加者

講師の押味氏による英語の小ネタが参加者の心をつかむ

主催者によると、今回の参加者約50名のうち医学生や医療関係に携わる人が半数を占めた。病院では医療英語の学習機会はほとんどなく、参加者の割合からも現場でのニーズが伝わってくる。実際に旭川市でも同伴家族への保険制度の説明への要請などが年数件あるとのこと。北海道を訪れる観光客が年々増加し、日本語がわからない傷病者に対して「医療英語」を使いこなす人材による対応が今後ますます必要とされるのだろう。

公益社団法人
北海道国際交流・協力総合センター
HIECC／ハイエック

〒060-0003 札幌市中央区北3条西7丁目 道庁別館
発行日：2017年2月10日
TEL. 011（221）7840　FAX. 011（221）7845　http://www.hiecc.or.jp
E-mail：intc@hiecc.or.jp（交流・協力部）
印　刷：岩橋印刷株式会社